

差別の力学

李昂「夫殺し」を読む

蕭幸君

【殺人】

峰が厚く刃の薄い刀は異様に重く、これを林市は両手で握ると、グサリと刺した。闇の中、突如、林市の眼前に現れたのはあの軍服の男の顔だった。眉から顎まで一筋の傷のある顔。次の瞬間、大声をあげてもがく豚の姿。喉には斜めに屠場の刀が刺さり、傷口から深紅の鮮血が大量に噴出し、全身を痙攣させている。

『夫殺し』一五〇頁

夫を、屠場の豚のように殺す。李昂²の『夫殺し』³の結末近くの、戦慄に満ちた凄惨な、しかし求道にも見えるこの場面に、強い衝撃を受けない読み手は果たしているだろうか。夫の屠刀を両手で握り、グサリと刺す。そればかりか、屠場の豚のように夫を解体する。テキストから断片的に切り取った上記の引用からでは、林市という女性は、ただただ凶暴で残忍な殺人鬼としか映らない。だが、『夫殺し』の読者が衝撃を受けるのは、その残酷さのためではない。なぜなら、読者は知っている。残酷さばかりが目立つこの殺人には、実に多くのことが語られようとしているのだ。

林市は愚かで無知な女だが、近隣には腰低く接し、夫の意向にはどこまでも従順で、決して人を傷つけることのできない性格の持ち主である。幼少時、母親が握り飯二つのために軍服の男に身を委ね、そのことが原因で一族の裁きを受けて水に沈められたとか、その男と一緒に町から姿を消したなどと、背徳の噂が飛び交う中、彼女は叔父に引き取られた。トラウマを背負ったまま、叔父のところでは家事労働を課され、やがて成人するや、わずかの豚肉と交換で豚屠しの陳江水に嫁がされる。その豚屠しの陳もまた、社会の下層において差別を受けてきた人である。貧困であるがゆえに、呪いを恐れず、彼は誰も手をかけようとしないう病気の母豚を屠した。それを契機に一人前の豚屠しになったが、母豚を屠した罪深さゆえ、陳の許には誰も嫁に来たがらない。ともに貧困の辛酸を嘗め尽くした二人が、なぜこうまでもどん底に追い込まれなければならなかったのか。互いを受け入れる気持ちで十分に持っているにもかかわらず、解りあえないまま、悲劇に一気に駆け込んでいくふたりの惨さ、自閉する苦境から脱し得

ない切なさ、社会的な抑圧から袋小路に追い詰められ、狂気に陥り、人を屠るという方法でしか、自他ともに「解放」し、「解脱」させる出口を見出し得なかった林市の哀れさ。これらの感情が絶えず、殺人の場面において喚起され、母親と軍服の男、鬼神の祟りや豚屠しの血生くさい幻影と重なり、哀歌は幾度も、幾重にも奏でられる。読者に戦慄を覚えさせたのは、まぎれもなく、この血獄から天へと向かい、救済の哀歌を奉げつづける求道者の苦難である。

【呪縛】

『夫殺し』の舞台は台湾中部に位置する港町、鹿港のある小さな町。一八世紀後半に中国とのあいだで、物資の運輸に活躍した台湾有数の港町だが、二〇世紀初頭に入ると、日本との交流にも一役買ったこの商業港は、溪流に運ばれてきた土砂の堆積で、もはやその役割を果たすことができなくなり、ついに廃港となる。伝統社会の慣習や作法などを強く守ってきたこの港町の面影は、市の旧跡保護政策によって残された数多くの建築物や民俗博物館から、いまでも当時の、レベルの高い文化を窺い知ることができる。船乗りたちによって栄えたこの町は、実に密集した形で住居と商店が交じり合っ建て建っていた。なかでも有名なのは、愛称「摸乳巷」と呼ばれた狭い小道である。通行人がひとり辛うじて通ることのできる小道で、向かいあって歩いてきた通行人は身を交わすことさえ困難である。女性がこの小道に入って、運悪く向こうから男性が歩いてきた場合、胸を触られてしまう覚悟もしなけ

ればならないこの細道は、「乳触りの道」とふざけて呼ばれたほどである。廃港となってからの鹿港は、住人を失う家が目立ち、暗い路地になると、幽霊が出てくるといふ噂がじつに多く聞かれた。



密集した形で建てられている鹿港の古建築物（2002.筆者撮影）

『夫殺し』の時代設定である一九四〇年代は、ちょうど鹿港が多種多様の異文化を一身に受ける状況にあり、新しい風潮や知識を吸収する一方、それに対して伝統文化を守る姿勢を更に固める人々もいて、新旧旧俗が抵触し合ったり、交じり合ったりする時期である。千変万化する海の天候で、その日の暮しが左右される港町の船乗りにとつては、縁起かせぎや鬼神を畏敬する慣習の多いことは、まったく不思議なことではない。『夫殺し』に出てくる井戸に投身自殺した美しいお化けの菊娘の伝説も、林市の異常なほどの迷信深さも、このような背景があつてこそ領ける設定である。この時代において、女性の教育はもっぱら年長の家族の女性に頼っている。林市は住む家をなくし、さらに唯一の教育者になりうる母親を失い、身を引き取ってくれた叔父のところも病身の叔母しかいないということ、無知な女性として成人する道を辿ることになった。彼女が教育者を得るのは、嫁いてからのことである。陳の隣人、阿岡官がそれである。新しい土地の慣習や礼儀作法、そして夫に対して取るべき態度や、困ったときの対処法を教えてくれる、もつとも身近な存在だからだ。林市の「常識」は、阿岡官によって植えつけられたものでしかなく、言ってみれば、彼女自身のアイデンティティの形成は、じつに畸型いびつそのものである。植えつけられた「常識」がやがて呪縛と化していったのである。

呪縛とは、まじないをかけて動けないようにすること、心の自由を失わせること。林市は、この二通りの意味合いにおいて心身ともに拘束されていた。

寡婦はやがて再婚するに違いないという理由で、林市母娘

は、一家の財産を叔父に奪い取られた。廃屋に等しい、一族の祠堂に風雨を凌ぐことをなんとか許してもらうもの、おりしも戦乱の世の中、母娘には仕事がなく、来る日も来る日も飢えが待っているばかりである。事件は大晦日に近い寒い夜に起きた。薪を拾いに出かけた林市が帰ってくると、軍服姿の男が祠堂に入っていく。危険を察し、林市が叔父に助けを求めると、駆けつけた人々は、二人を祠堂の太い柱に縛りつけ、どう処置をするかの相談で騒ぎ、動いた。赤い衣裳を纏い、太い柱に縛りつけられ泣き喚く女。それが林市にとって、母をめぐる最後の記憶である。

母を救うための行為が予想外の結果を招き、かくして林市は母を失う。貧困、飢え、倫常に悖り、不貞とされた性的な事件、裏目に出してしまった母の救出、そしてなにより、母親の喪失が神霊の支配下にある、一族の先祖を祭る祠堂において起きたこと。林市の無知や、社会の抑圧に対しての無力さ、鬼神に対して、必要以上に畏敬の念を抱く性質なども、この一連の出来事によってもたらされた。

母を死へと追いやつてしまった衝撃や世間の規範から外れ、一族のみならず天罰も下るような母の行ないは、林市を解ききたい呪縛へと突き落とした。悲劇の下敷きはこうして着々と積みあげられていったのだ。



産港の人々の女性神媽祖への篤い信仰は、今でもかわらない (2002. 筆者撮影)

【摺りこまれた宿命】

豚屠しにおいては凄腕を持つ陳だが、四〇歳になってやっと結婚相手を得たことで、その喜びも一方ではなかった。長年外の露店で食事を済ませ、時には売春宿に足を運ぶという独身生活から、彼は家庭の温かみに飢えていた。ろくに飯も食えなかった少年時代から、彼はかなり満足のできる立場まで登りつめた。少量の豚肉と交換で得た嫁だからこそ、いっそうの満足感を得られた。いや、むしろこれまで持つことのできなかつた優越感を、自分の女を持つことで、彼は味わい得たのだ。女は自分の顔色ひとつで一喜一憂し、咳払い一つで身を動かす。文字どおり、彼は一家の主になった。

だが、この陳江水の小さな幸せは永く続かなかつた。若くて美貌の妻に嫉妬し、虎視眈々と機を覗っては林市を陥れようとする隣人、阿岡官がいる。彼女は若くして夫をなくし、一人息子を女手ひとつで育てた。孤独で辛い半生を送ってきた老婦人である。不幸のトライアングル。

林市を乱暴に扱う陳江水の粗暴さを、隣人はまったく意に介さなかつた。阿岡官が常に耳を立てて盗み聞きしているのは、陳の性的暴力に堪えかねて苦痛を訴える林市の悲鳴である。悲鳴を苦痛と思えず、それを性的満足と解釈し、次から次へと、彼女は林市によからぬことを吹き込む。七月にできた子はお化けの生まれ変わり、そのような子を産まないためには、嘘をついて夫を避けるがいいと、鬼神の威力を借りて林市を脅かすのだ。ところが、性的関係はともかく、陳が林市との関係で得た快感はなによりも、優越感そのものである。

林市を組み伏し、激しい悲鳴を上げさせることで、彼が主であると確認する。林市を折檻することで優越感を得ていた陳は、その主の威厳を、林市の強い拒否によって損ねられた。彼女はいくら虐げられても決して声を上げようとしなくなった。夫はやがて、ふたたび売春宿に通い、林市によって傷付けられた自尊心を取り戻そうとする。しかし、一方、陳の林市への暴力は日に日に増してゆき、食事さえも取り上げるようになる。

【清算にむかって】

この物語の作者李昂は、主人公たちを追い詰める手を緩めず、次から次へと悲劇のクライマックスの準備をする。阿罔官の密通が嫁に暴露され、そのことで首吊り自殺を図ったが未遂に終わった。だが、この一件で林市夫婦間に摩擦が惹き起こされ、陳がますます林市に激しい折檻をするようになる。林市が自活するために飼った雛鳥をメッタ切りにし、彼女を屠場に連れてゆき、屠殺の現場を見せ、豚の腹から取り出した生ぬるい腸を手渡し、腸の洗浄を命じる。夥しい真紅で染められた屠場と内臓を目の当たりにし、林市は意識を失う。自分を陥れようとする阿罔官を救い、首吊りの霊の祟りを恐れる林市に、畳みかけるようにやってきた衝撃は、かつてのトラウマを喚び醒ます。林市の精神は、決壊を見せはじめた。

愚かで無知なゆえに、嫁いだ新しい環境に必死に順応しようとして努力し、近隣の悪意に満ちた仕打ちや夫からの暴力に対しても、林市はあくまでも消極的な抵抗しか見せなかった。自力で生計を立てようと考えても、せいぜい同じ町で日雇いの仕事を

探すか、逃れたいと思っている夫の自宅で雛鳥を飼うかくらいしか、絞り出す知恵を持たなかった。であるのに、夫の顔に泥を塗る、そう思う陳は怒り狂う。残された道は、自滅ひとつ。

口汚く罵る陳の意図しないところに、林市を刺激してしまつたことばがあつた。彼は怒りに任せて、林市の母親を汚す言葉を吐いてしまつた。林市の精神がすでに破綻する寸前までできていたことを知らずに。飢え、母親の記憶にまつわる忌まわしい性的事件、鬼神への畏れ。重なる痛みの記憶が一斉に喚び起こされた瞬間、彼女は屠刀を手にする。記憶のなかの悲劇が二度と繰り返されないよう、贖罪を執行する。

陳を恨みで屠つたのではない。陳を罪深さから解放し、自らが呪縛から脱出するためだつたのだ。狂乱した精神のなかで、すべての清算を求めた。母豚から、産まれることのできなかつた仔豚たちの無念を、母の遺恨を、陳と自分の罪を、海に葬ることで帳消しにする。林市のなかでは、これですべては完結したはずだつた。ところが、世間からの制裁は、まだこれから始まろうとしていたのだ。

【祭り上げられた悲劇の主人公】

隣人の阿罔官は死体遺棄の発見者となつた。若くて美貌の新妻が夫を殺したということ、小さな町があふれかえるほど騒ぎ、色めき立つた。林市はなぜ陳を殺したのか、法律の裁きはどうなるのか、好奇心で充血した視線が林市の瘦身に降り注ぐ。

世間を騒がせた陳林市夫殺しの一件は、姦夫を調べ挙げられなかったものの、陳林市は人倫に悖る重罪により、収監後銃殺の判決が下り、昨日すでに台南府の監獄に送致された。社会世論、民俗国情に応え、送致前に特に陳林市をトラック荷台に縛り、八名の警官が護送し、さらに一名が銅鑼を打ち鳴らして市内を引き回した。陳林市の至るところ、黒山のごとき人だかりができ、町中総出で賑わった。しかるに、見物人の間には、陳林市はすでに美貌を失い、さらには姦夫の存在も欠き、引き回しもこのために興をそがれたと惜しむ声もあった。……

「夫殺し」八頁

人々の好奇心は林市の引き回しでは満足できず、ことの「真相追求」に熱中した。「目撃者」の阿岡官は一躍町中の人気者となった。「姦なくんば殺に至らず」、これが林市の夫殺しを語るさい、阿岡官の口からたびたび聞かされることばである。林市母娘のことを戒めに、人に語って聞かせる。密通する相手などどこにもいないだが、「姦なくんば殺に至らず」という「目撃者」の「証言」は、真実を歪曲し、表向きの事実として残るのみであった。

李昂は作中人物たちに残酷な運命を背負わせたうえ、残酷な結末まで設けた。ただ波のようにやってくる出来事の数々に呑まれていくだけで、林市は事実、夫を殺すまで何一つ世間に叛いたことなどなかった。それでも平穩に暮らそうとする彼女は、殺人を犯さぬわけにはいかなかった。夫以外の男ができただけでもなく、ただ精神を病み、殺人を犯すまでに追い込まれていく。そして、裁きを受けてからも、決して彼女の「真実」は知らされることなく、林市は悪徳の噂の主人公になる。

【望みなき無解決？】

「夫殺しの物語」は数多く存在した。密かな楽しみとして読まれてきた中国の『金瓶梅』には、知らぬ者はいない「夫殺しの物語」がある。長きに渡って「淫婦」の代名詞ともなるほど有名である、妖艶な潘金蓮の武大殺しがそうである。夫の弟で、武勇無比の武松を誘惑したが叶わず、今度は西門慶という男と共謀して夫を殺した。物語は、トラを倒したこと、で武勇伝に名を残す武松が、兄の敵を討って一件落着となる。潘金蓮はむろんのこと、「婦徳」に背いたその裁きとして殺され、悪婦の醜名を今日まで残すこととなる。潘金蓮の夫殺しは、ひとつの典型的なパターンとして定着し、彼女の「真実」はこのひとつの物語に限る。女性が夫を殺した場合、いかなる理由があったとしても、かならずやその背後に男—いわゆる情夫—がいると、世間からは責められがちである。『夫殺し』に出てくる「姦なくんば殺に至らず」ということばは、まさにこのような背景によるものである。

李昂の『夫殺し』が書かれる背景には、もうひとつの「夫殺しの物語」が存在している。昔の上海のゴシップを集めた『春申旧聞』に収録された「周夫人の夫殺し」である。日本占領下の上海で起きた事件だが、最初は女性の密通による犯行だと思われた。ところが、調べてみると、女性は夫の虐待に堪え切れず犯行に及んだということが明らかにになり、珍しい事件として『春申旧聞』に収録された。李昂はこれに関心をもち、女性の夫殺しについて考えるようになったという。だ

が、これらの「夫殺しの物語」との決定的な違いは、林市の夫殺し一件によって逆照射されるもろもろの問題である。林市はなぜ、夫の町から離れようと考える知恵を持たないのだろうか。娼婦金花の前ではやさしさに溢れる陳江水が、ついぞ林市と分かり合える日がやってこないのはなぜか。林市夫婦を破局に追い込み、悪役さながら、見事に生き残って林市らのゴシップを語って悠々自在の阿岡官は、密通騒ぎの一件を除いて、なぜ裁きを受けることがなかったのか。紋切り型の「勸善懲惡」を逆手にとって書いたと思われるこの『夫殺し』だが、阿岡官が自分のことを棚にあげて、のうのうと婦徳を説く皮肉な結末に、確かに型破りの面白さがある。だが、それよりも、それぞれ的人物が、社会からの抑圧と差別を受け入れながらも、捌け口を見出せずにその不満や屈辱を抱えたまま、そうした状況にあまりにも無自覚であることのほうが、明らかに重要である。この小説の皮肉な結末が物語るものはいったなにか。これらの不満や屈辱は、ある日不意と捌け口を見つけ、なんらかの形で人におつけられる。そこには決してカタルシスなどない。ぶつけてもぶつけても消えることなく、いつまでも繰り返されひびいてまた顔を出す。それが、阿岡官のいじわるにつながり、陳の暴力につながり、林市の意地っ張りにつながる。それぞれの不満や屈辱がぶつかり合う結果が、林市の「夫殺し」である。陳の死はなにも解決しなかったし、なにも生み出しはしなかった。男性による性の支配に対する復讐劇も当然のことながら、阿岡官の歪んだ生き様もまた、不気味なほど、受け継がれ継続していくしかないのである。もつとも哀れな林市もやはり、暴力夫を殺したものの、それでなにか心の安らぎを得ることもな

いである。複雑な人間性を、鋭く抉り出して見せたこの作品は、なにひとつ希望めいたものを与えることはない。これほど救いのない小説を眼前にして、読者は手をこまねいているしかないのか。

【そして何処へ？】

『夫殺し』は、つねにフェミニズム小説として取り上げられ、議論の焦点はもっぱら林市一人物に集中している。しかし、作中に登場してくる主な人物を整理してみると、夫に死別した林市の母親をはじめ、主人公の一人である林市は両親を亡くし、引き取ってくれた叔父からは、身売り同様で陳江水のところに嫁がされる。その陳はというと、実に林市の悲運に劣らず、辛い境遇を経験している。豚殺しという職業もさることながら、その職業を得るまでの陳は、自活するために豚の糞を拾うときでさえ、周囲にいじめられる始末で、屠場の人々が恐れて手を下そうとしない病気の母豚を屠ったことで、やっとならぬ豚殺しの仲間入りができたのだ。また、陳と馴染みの日陰の女、金花も辛酸を嘗め尽くした一人である。夫を亡くしたあと、夫の家族に売春宿に身売りされた。それでも、子が産めないことで婚家にうしろめたさを感じ、金の無心を許しつつづけた。そして、なによりも林市の隣人である阿岡官という人物は、社会規範の力を借り、大義名分を並べ立てて、なにかと迫害の加担者として見られがちだが、しかし、その彼女も夫と死別して、ひとり息子が成人するまで、長い年月孤園を強いられるという、理不尽な社会規範の犠牲者である

ことを忘れてはなるまい。このように、書き手の細心な配慮によって、『夫殺し』はさまざまな下層の人物を設定して描かれている。社会的になんらかの理由で低い立場に置かれてきた人々。それが職業であれ、性差であれ、立場であれ、差別とは、人と人との関係において絶えず生じうるもの。李昂の『夫殺し』における差別の力学は明白なのだ。

だから、この作品は決してフェミニズム小説という議論で片付けられるものではない。李昂のまなざしは、決して女性の抱えている問題にだけ向けられているわけではない。陳江水と林市の悲劇は、凶暴なまでに性的関係を夫から迫られた妻が殺人を犯すという、家庭内バイオレンスの構図は持たない。なぜなら、林市は幼いころから辛抱強く、自分の運命を受け入れることに馴れっこなのだ。こころの傷みに馴れ、体の痛みにも馴れ、小さな動物のように、虐められたときはただ微かに裏声で唸り、その場をじつと堪えきる。傷口を舐めるのはいつも独りになつたときに限る。だが、林市はそういう生活にひとときの安らぎを感じることさえあつたのだ。凶暴な夫は、彼女にとつてたつたひとりの家族なのだから。その家族を、暴力という理由で殺したりはしない。ましてや豚を屠るように夫を解体し、海に遺棄するなど、到底、林市のできることはない。彼女に刀を振り下ろさせたのは、文字どおり、狂気そのものなのだ。

林市という女性を発狂に追い込んでいったのは、伝統の重圧や道徳規範が生み出した抑圧である。フェミニズム文学のひとつに数えられてきたこの作品は、「二人の問題というよりも、周囲の人物、社会制度がもたらしたもの」だと作者が語る。よ

うに、単なる女性差別を描くものでは終わらない。抑圧を受け

た人間がさらなる抑圧を生み、差別を受けた人間がさらなる差別をよぶ。なにが「悪」で、またなにが「正義」なのか、「真実」とは存在するものなのか、否か。なにを基準に据えて論断するのか。ただただ堂々巡りで、林市の悲劇のように、出口はない。

【新たなる生の獲得】

この小説には暴力夫をやつける英雄的な女主人公は存在しない。「真実」はやがて明らかにされる、という神話も存在しない。悪いことをしなければ、災難は決して自分の身に降りかかることはない、という安全宣言もありえない。

林市の夫殺しをもう一度考えてみよう。取り調べを受け、彼女はどのように供述している。

夫は凶暴残酷で、連日飲酒賭博の後、帰宅すると妻に暴力を振るうのを楽しみにしていた。妻が殺生の場を目にするのを恐れることを知るや、無理矢理これを屠場に連れだし、豚を屠るところを見せた。事件当日、夫は屠場用の刀を掲げて帰宅し、凶悪な様子を呈していた。形勢は妻にとつて思わしからず、夜明けに夫が熟睡するのを待つて、妻は見様見真似の屠畜法により、豚を屠るがごとく夫を解体した。夫が生涯屠畜してきた豚は数知れず、その霊に代わつて仇を打つてやったのだという。

『夫殺し』七頁

新聞に掲載されたこの記事にある、豚の霊に代わつて仇を討つたという林市の供述は、いかにも笑止千万である。もつ

とも、これは新聞記者の目を通しての林市の一面であり、供述に対しての新聞記者の「理解」を記すものでしかない。林市の夫殺しを決定的にしていったのは、彼女の精神に異常を来たすほどの衝撃が立て続けに襲ってきたことである。立て続けに与えられた衝撃の連鎖によって、「夫殺し」は惹き起こされる。母とともに過ごしてきた、寒さと飢えに堪える日々の記憶、そこには死者に供える食べ物にまつわる衝撃的な体験があり、それが阿岡官を自殺から救ったために首吊りの霊の怒りに触れる畏れから、供えた豚足を無理やり陳に食べさせられた体験と重なる。また、陳との夫婦生活を盗み見しては、林市の男好きは母親ゆずりだと言いふらす阿岡官のことばを不意に聴いてしまったことで、彼女は陳との関係を、かつての母親と軍服の男の関係を重ねてしまう。「おっ母さんをやってやる、てめえもやってやる」という怒り狂う陳の罵りのことばに刺激され、屠場の現場を目撃したことでおかしくなった精神が、いつそう現実の世界から引き離されてしまう。彼女はひたすら母の供養を願ひ、霊の恐ろしさにおののく異界に、足を踏み入れたのである。陳に無理やり犯された後、目に付いた刀を執り、彼女は無我夢中だった。豚の霊に代わって仇を討つ。そのことばに、偽りはなかった。

これまででじつと我慢してきた林市が行動を起こす。夫の陳を豚のように屠る。これは彼女が他者へ向かってした、初めての意思表示である。それはもはや、抵抗ではなく、意思そのものである。すべてを清算して、ゼロから出発するための意思表示。それが夫を殺すこと。

あらゆる差別のベクトルを冷徹なまで見据え、人間本能における闘いを劇的にまとめた李昂の『夫殺し』、ここまでくれば、もはや断罪できるものはなにもない。

注

ここで使用したすべての表現に、差別や偏見の意図がないことを断っておく。

1 李昂、宝島社、一九九三年六月一日、藤井省三訳。

2 李昂、一九五二年台湾彰化県鹿港生まれ。カフカ、D・H・ローレンス、フロイトを愛読し、作家と評論家の二人の姉に影響を受け、中学二年のときに小説を書きはじめた。高校一年、新聞に投稿した短編「花の季節」が「一九六八年短編小説選」に入選し、少女作家としてデビュー。一九七〇年台北の文化大学哲学部に入学し、『鹿城物語』シリーズを執筆。一九七五年、アメリカのオレゴン州立大学演劇コースの大学院に入学、修士号を取得。一九七八年帰国後、母校の文化大学演劇学部で教鞭を執り、創作活動を続け、現在に至る。去年（二〇〇二年）、東京で作者に会う機会を得た。現在、ある創作に没頭しているという。今度は、読者たちにどのような刺激的な作品を見せてくれるのか、楽しみは大きい。

3 『夫殺し』は、郷土の色彩豊かな『鹿城物語』シリーズの一作で、原題「殺夫」。一九八二年に、『聯合報』紙に連載され、翌年八月に『聯合報』中編小説賞首席を受賞。同年一月、同シリーズの短編とともに、『殺夫—鹿城故事』のタイトルで、聯合報叢書の一冊として出版された。

4 『夫殺し』巻末インタビュー、一六四頁。

5 『夫殺し』巻末インタビュー、一六六頁。